Interview

〝男女参画型武道〟を提唱する橋本敏明さん

月刊「武道」編集委員

武道というと、男の世界というイメージが先行しがち。そんな世界にいながら、あえて「武道と女性」というテーマに挑戦している男性がいました。

●橋本敏明（はしもととしあき）さん

1949年、広島県生まれ。東海大学文学部卒業。東海大学柔道部総監督の佐藤宣践門下の第一期生。海外柔道指導の経験を経て、76年に東京都武蔵野市に創設された松前柔道塾の中心となって活動を展開。柔道による健全な青少年育成を目指してジュニア柔道の指導と発展に取り組んでいる。現在、東海大学体育学部教授、国際武道大学非常勤講師。東海大学望星学塾、松前柔道塾副塾長。著書に『ジュニア入門シリーズ⑨柔道』、『シリーズ絵で見るスポーツ⑮　柔道』（ともにベースボール・マガジン社）などがある。

月刊「武道」という雑誌があります。財団法人日本武道館の発行で、武道全般を網羅し、ニュース、インタビュー、施設紹介、研究、小説、歴史物、随筆とバラエティーに富んだ内容です。その中で昨年九月号から「武道と女性」という連載が始まりました。ちなみに、記念すべき第一回のゲストは、わがWSFジャパン代表の三ッ谷洋子さんでした。企画・構成担当でWSFジャパンの会員でもある橋本敏明さんにお話を伺いました。

肉体と精神を同時に鍛練する武道

――「武道と女性」というテーマを選ばれた理由をお聞かせください。

「一つは、これからの男女同権の世の中で、武道がそれにどう対応していけるのか、現状はどうなのかを知りたかったのです。二つ目は、女性自身がどんな認識を持っているのか興味があったからです」

――というと……。

「ちょっと難しくなりますが、武道は体を鍛えること以外に、哲学的な要素を持っているのです。新しい武器が次々にできても武道がすたれなかったのは、それが人間自身を鍛える〝教育〟の意味を持っているからです。理論的には徳川時代ごろから、禅宗や儒教の教えも入って体系化されていきました。禅宗の基本的な考えは、〝対立しているもの・矛盾しているものを克服する〟ことです。

そこでは、男と女を対立概念としてはとらえないのです。しかし果たして実際に、男・女という存在を〝克服できる〟のだろうかという思いがあったわけです」

――これまで十五回対談をしてこられて、どんな印象ですか。

「ゲストを探すときは、競技・年齢など〝まんべんなく〟を心がけています。だれが特別印象的ということはないんですが、みなさんそれぞれにとても真剣に取り組んでいらして、私のほうがいい勉強をさせてもらっています。

現代武道というのは九つあります。少林寺拳法・空手道・剣道・なぎなた・合気道・柔道・弓道・銃剣道・相撲です。この連載は二十回を予定していますが、まだ取りあげていないのが相撲です。相撲は携わっている女性が少ないものですから、もし実現するとしたら、部屋のおかみさんにでもなるのでしょうか」

待たれる高い意識の女性

――十月のアジア大会で、女子の柔道や空手が優秀な成績をおさめて注目を集めていました。それでもまだ〝武道は男性社会〟というイメージがあるのですが、実情はどうなのでしょう。

「武道は、年功序列など形式的な部分はたしかに多くあるかもしれません。いまの時代、武道に限らず、社会の制度・仕組み自体が男性主体にできていますよね。それを男女が共有できる仕組に変えていくべきだと思っています。そして武道もそういうあり方を考えていくべきでしょう」

――競技人口の男女の比率はどのぐらいでしょうか。

「女性主体で成り立ってきたなぎなたは別ですが、それ以外はやはり圧倒的に男性が多いですね」

――どの競技も男女一緒に練習できるのですか。

「だいたいできます。私の専門の柔道でも、以前は女と組んで練習するなんてという風潮がありましたが、最近

はそんなことはありません」

――指導者の比率はどうでしょうか。

「男性のほうが多いですね。というのは、女性はまだ日が浅いわけですから。もう少し時間がたてば女性指導者も増えると思います」

――武道はとりわけ激しいスポーツですが、男性指導者は女性選手の生理のことなど理解していますか。

「スポーツ医学の知識のあるスタッフも増えているので、理解はしていると思います。ずいぶんフランクに話せるようにもなっています。ただどうしても感覚的にわからないし、柔道では減量という問題もありますから、やはり女性指導者の力は必要でしょうね」

――なぎなた以外で各連盟や協会に女性役員はいらっしゃいますか。

「ほとんどいないか、いてもとても少ないと思います」

――これから、役員の門戸が女性に広げられたときに、適切な人材はいらっしゃるのでしょうか。

「うーん。たとえば米国になら、ラスティ・カノコギというパワーを持った女性がいます。（三ページ参照）彼女はロサンゼルス五輪（一九八四年）で女子柔道が競技への採用を否決されたとき、『不採用は差別であり、国連や法廷に訴える』と抗議したのです。私はそのとき彼女たちの意識の高さに驚きました。彼女たちの努力と、国際柔道連盟会長だった本学の故松前重義先生の協力でいまの女子柔道はあるわけです。

ただ日本では、そういう人材が出てくるまでまだまだ時間がかかるかもしれませんね」

――女性が指導者になるとしても、連盟や協会で役職につくにしても、結婚・出産・育児の壁を乗り越えなければならないと思いますが、その点についてはどうお考えですか。

「女性の出産・育児というのは社会的にとても大切な役割です。また普及の面から考えても、お母さんの力は必要なのです。剣道・弓道・合気道などは年配の方でも十分できます。いったん競技を離れてもまた戻ってこられる環境を作っていきたいと思います」

〝男女参画型〟に理解を示す若い世代

――今後の武道界のあり方についてのお考えを聞かせてください。

「〝男女参画型武道〟のあり方をめざして、知恵を絞っていきたいですね。そうしないと二十一世紀に武道は生き残れないでしょう。先ほど女性の力がぜひ必要だといいましたが、逆のこともいえるのです。女性はどんなに疲れていても体力の二〇％は残しているそうです。それはおそらく女性としての本能なのでしょう。それぞれの持ち味を尊重しながらそういう男女の違いも認めること。結局、男性の力も必要だと思います。ただこういう〝男女参画型武道〟という考え方は、まだ武道界ではマイノリティーかもしれません。でも若い世代の人たちは受け入れてくれています」

◇

橋本先生は、武蔵野市にある望星学塾の副学長という肩書きもお持ちです。取材当日、「子供たちと柔道の練習でケガしちゃって」と左手に包帯が巻かれていました。

望星学塾は、松前重義氏が一九三六年に始めた私塾です。地域に根ざした生涯学習の場をめざし、松前柔道塾の他、講演会、スポーツ健康教室、カルチャー教室などを開催しています。

大学で教えていらっしゃるのは、〝武道学〟。「実技の方は、山下先生（＝泰裕氏・ロス五輪金メダリスト）たちにお任せして、私は理論のほうをやっています。（笑）」

武道は学問・教養としての側面を合わせ持った奥の深いものであるということがよくわかりました。

「WSFジャパンニュースには、しっかりした考えのもとに活動できる人を育てるための情報紙として期待しています」とエールを送っていただきました。橋本先生の柔軟な考え方が少しでも早くマジョリティー（主流）になる日がくることを願っています。

（十月二十五日取材・聞き手／WSFジャパン・スタッフライター　山本尚子）

翔け！ スポーツマインド

ランナーズは、雑誌及びイベントを通じて生涯スポーツの推進を呼びかけています。

■ランナーズの出版物

月刊ランナーズ／トライアスロンジャパン／ファンライド／ほか書籍等

■1995年冬の自社イベント

合歓の郷ハーフマラソン　2月5日

デュアスロンシリーズIN昭和国営記念公園　2月25日、26日

サイクルエンデューロ 広島ステージ　3月19日

株式会社ランナーズ／〒153 東京都目黒区東山2－6－4